

翻訳と啓蒙の二重奏

——福沢諭吉の翻訳観を中心に

王 曉 雨

Fukuzawa Yukichi's Concept of Translation and the Enlightenment of Modern Japan

WANG Xiaoyu

While revising the process of making the modern Japan, it's hard to not noticing the important role of translation works in this era. As one of the most important translators in Bakumatsu-Meiji period, Fukuzawa Yukichi's translation greatly helped the understanding of Japanese toward the Western world. Especially the easy-reading feature helped to make his works famous and influential at the time. In this article, we will discuss why, what and how Fukuzawa derived his idea and translating style through historical analyzation, which could also help revealing his inner understandings of Western culture and vision of modern Japan.

Keywords: 福沢諭吉 (Fukuzawa Yukichi), 翻訳 (Translation),
西洋観 (Western View), 啓蒙 (Modernization Enlighten)

一、はじめに

日本近代化のプロセスを振り返ると、外来文化を取り入れた際に、翻訳が不可欠な要素であったことは明白である。鎖国時代の日本ではオランダを経由し、医学や植物学をはじめとする西洋の科学知識が紹介されてきた。そして明治維新後、自然科学に限らず、膨大な西洋文献が知識人の翻訳や著書を通じて日本に流入し、近代化を推し進めた。『明治文献目録』によると、明治元年（1868）から23年（1890）にかけ、西洋から訳された単行本は1469種もある。これは毎年平均69種の図書が訳されたことを意味する。¹⁾ 西洋文明伝入の萌芽期であるこの時期に、如何に翻訳事業が精力的に行われたかが伺える。これらの翻訳書から、日本は西洋の知識文化を取り入れ、自分なりの近代化の土台を築いたといえるだろう。²⁾

1) 高市慶雄, 『明治文献目録』, (日本評論社, 1932年), 175頁。

2) この翻訳時代の出現が可能になった原因について、加藤周一の「明治初期の翻訳——何故・何を・如何に訳したか——」

明治期の翻訳事業に関して述べると、福沢諭吉の重要性は言うまでもない。英語を独学し、海外遊歴を経て、帰国後、収集した西洋図書の日本語訳に尽力し、多大なる貢献を果たした。福沢はこれらの訳書を通じ、日本国民の西洋理解を深め、「彼（西洋）の敵視す可きものか其友視す可きものかを辨別」³⁾しようと考えた。また1866年（慶応2）に上梓された『西洋事情 初編』（1866）をはじめとし、『西洋旅案内』（1867）、『訓蒙窮理圖解』（1868）、『世界国盡』（1869）、『童蒙をしへ草』（1872）などを次々と出版し、明治初期の啓蒙事業に力を注いだ。特に『西洋事情』の販売部数は（偽版も含め）二十万ないし二十五万部に至る。これは福沢生涯において最も売れた本とされており、絶大の影響力を発揮したと言える。また、福沢の翻訳は平易で読みやすいため、知識人から百姓町人に至るまで広く読まれ、その影響は広い範囲に及んだ。しかも、上述したように直接に翻訳書と明記したものだけではなく、福沢の代表的な作品、例えば、『学問のすゝめ』や『文明論之概略』などにも翻訳の色味を帯びていた。⁴⁾つまり、本文が論じた福沢の翻訳観は狭義的な文字転換作業の翻訳にとどまらず、彼が西洋から知識文化を輸入する時の受容姿勢も検討の視野に取り入れようとする。

明治期の重要な思想家として、福沢研究は先達によって汗牛充棟と言っても良いほどの業績が蓄積されている。しかし、先行研究の多くは「近代化」という先験的な枠組み⁵⁾から、日本社会における「近代的」な体験を福沢の思想境地と結びつけたものが殆どであり、福沢の「翻訳」を主体とした研究はまだ検討する余地が残っていると感じられる。「福沢諭吉全集緒言」において、福沢は自分の翻訳著書が文明開化華々しい実績の一部だと直言している。実際、福沢の翻訳は確かに明治初期の啓蒙事業に大きな役割を果たした。そのうち、翻訳によっていかに西洋を日本に取り入れ、日本国民に受容されたかということ、つまり福沢の翻訳観を捉えることは、彼が近代日本に与えた影響を理解するために有効なアプローチだと考えられる。

福沢の翻訳に関しては、柳父章、加藤周一などの代表的な研究が挙げられる。⁶⁾特に、柳父章は福沢の

（加藤周一、丸山真男校注、『翻訳の思想 日本近代思想大系15』、岩波書店、1999年、342-370頁）に参照できる。

3) 福沢諭吉、「西洋事情」『福沢諭吉全集』（第一巻）（岩波書店、1969年）、285頁。

4) 板倉卓造の研究によれば、『学問のすゝめ』の六・七編の内容は、実は、アメリカのBrown University学長Francis Wayland (1796-1865)の著書『修身論』(The Elements of Moral Science, 1836)から訳されたものである。また、『学問のすゝめ』の二編が原書の一九一頁以下Duty of Reciprocity、六編が三六三頁以下Duties of Citizens、七編が同上、八編が二〇二頁以下Nature of Personal Libertyによったものであると明らかにしている。（伊原沢周より、『日本と中国における西洋文化摂取論』、汲古書院、1999年、13頁）。また、『文明論之概略』はギゾーの『ヨーロッパ文明史』を一つの基本テキストとしつつ、日本の現実を分析し、将来を展望したものである。（柳父章より、『翻訳語成立事情』、岩波書店、2003年、38頁）

5) この方面における代表的な研究は丸山真男氏の「福沢における秩序と人間」（1948）「福沢における『実学』の転回」（1946）、「福沢諭吉の哲学」（1947）、「座談会・近代日本と福沢諭吉」（1984）など一連福沢に関する研究成果、また、遠山茂樹氏の「日清戦争と福沢諭吉」「福沢諭吉の歴史観」（1951）、『福沢諭吉』（東京大学出版会、1970）、鹿野政直氏の『日本近代思想の形成』（辺境社、1970）などの研究成果が挙げられる。

6) 翻訳から福沢諭吉を述べた研究で代表的なものに、松沢弘陽『近代日本の形成と西洋経験』（岩波書店、1993年）、安西敏三『福沢諭吉と西欧思想』（名古屋大学出版会、1995年）と『福澤諭吉と自由主義』（慶應義塾大学出版会、2007年）などが挙げられる。福沢諭吉の翻訳を一部として言及した研究では、たとえば以下のようなものがある。加藤周一・丸山真男編『日本近代思想大系15 翻訳の思想』（岩波書店、1991年）、柳父章『翻訳語の論理——言語にみ

用いた翻訳語を中心に分析し、その中に反映された福沢の言葉遣いの論理、つまり、思想方法を解明した。⁷⁾ こうした研究について、翻訳意欲、翻訳内容に対する選択なども検討の範囲にいれば、より一層福沢の翻訳観を全面的に把握できるのではないだろうか。彼の「翻訳観」とは如何なるものなのか。この問題には、より系統的な論述が必要である。本稿において、福沢の翻訳に焦点を当て、福沢の翻訳における従来の言語学的見解を意識しつつ、「思想としての翻訳」という立場から福沢を読み直したい。

二、翻訳と文明開化

1、翻訳事業の契機

福沢諭吉は22歳から蘭学者の緒方洪庵に師事し、オランダ語や医学知識などを身につけた。しかし、1859年（安政6）、横浜を訪れた際、街中至る所に自分が馴染まない文字が使われていることにより落胆したようであった。⁸⁾ 数年間をかけて必死にオランダ語を習得したにも関わらず、街中の看板すら読めない事実は当時の福沢に大きな衝撃を与えた。これからは英語の時代であることに気づいた福沢は、英語の勉強を始め、その後、二度もアメリカに渡り、ヨーロッパを訪問する使節団にも参加した。時代の流れを敏感に読み取ることができた福沢は様々な困難を乗り越え、身をもって西洋世界を体験してきた。実践で磨き上げた英語力と西洋見識を身につけることによって、はじめて福沢に翻訳著書の土台が整ったのだと言える。翻訳の目的に関して、福沢は「西洋の事実を明らかにして、日本国民の變通を促し、一日も早く文明開化の門に入らしめんとする」⁹⁾ と述べている。つまり、翻訳著書のもっとも重要な目的は西洋知識を紹介することにより、日本国民に西洋文明の長所を教授し、文明開化の道に導こうとすることであると福沢は考えていたのである。それに対して、鹿野政直氏が「(明六社) 社員のなかで、西洋の導入と人心の改造にもっとも包括的な構想をもち、大きな影響力をもったのは、いうまでもなく福沢諭吉です。」¹⁰⁾ と評価した。

福沢が著書翻訳を通じ国民を文明に導くという志を抱いたきっかけは、明治初期に起きた二つの事件であった。一つは当時のイギリスの王子が日本に訪問した際に、潔身の祓を要求されたこと。維新改革を実施した明治政府がここまで愚かで不開化であったと福沢は痛感した。もう一つの事件はもともと親日派であったアメリカ前国務長官シーワルトが来日した後日本に対して下した評価であった。当時、親日派のスワード (William Henry Seward, 1801-1872) は訪日した後、「その日本の実際を見て何分にも最良が出来ぬ、こんな根性の人民では氣の毒ながら自立は六かしい」¹¹⁾ と断言した。この発言が福沢に大きな衝撃を与えた。

る日本文化の構造』(法政大学出版局, 1972年), 『翻訳とはなにか』(法政大学出版局, 1976年) など。

7) 柳父章, 『翻訳語の論理——言語にみる日本文化の構造』(法政大学出版局, 1972年), 53-86頁。

8) 福沢諭吉, 「福翁自伝」, 『福澤諭吉全集』(第七巻), 80-81頁。

9) 福沢諭吉, 「福澤全集緒言」『福澤諭吉全集』(第一巻), 27頁。

10) 鹿野政直, 『近代思想史案内』(岩波書店, 2002年), 50頁。

11) 前掲, 「福翁自伝」, 162頁。

左りとして自分は日本人なり、無為にしては居られず、政治は兎も角も之を成行に任せて、自分は自分で聊か身に覚えたる洋学を後進生に教、又根気のあらん限り著書翻訳の事を勉めて、万が一にも斯民を文明に導くの僥倖もあらんかと、便り少なくも獨り身構へした事である。¹²⁾

この文章から、当時の福沢が国民の自立の欠如を痛感し、国民に自立させるために著書翻訳に努めようとしたことは明らかである。自身の洋学知識を活かし、日本の国民を文明の道路に導こうと望んだ心境も伺えるであろう。

しかし、当時において、開国反対の世論は依然として根強く存在しており、一般国民は、多くが西洋に対する誤解を持ち、西洋からのものを強く排斥し、開国に抵抗していた。この世論に対して、福沢は1865年（慶応元）に「唐人往来」¹³⁾（出版せず）という短文で応酬した。ある外国人嫌いの老婆を口説くためのものという名目であったが、実際は民衆の西洋に対する誤解を解消するために創作したものである。本文中で福沢は今の世界情勢を説明し、清国が西洋を軽視し、自身の発展を怠った結果、国家存亡の危機に瀕していることを述べ、古来の華夷思想をもって西洋各国を軽蔑するのではなく、日本も西洋を見習うべきだと主張した。さらに、1870年（明治3）の九鬼隆義氏宛の手紙において、版籍奉還による一連の騒動を「愚民」が乱を起こしたと酷評したこともある。そのような行動を起こした原因は貧窮ではなく、無知無学であるとし、その人達には、金銭より知恵を与えるべきであると指摘した。また、「人に智慧を附るには先づ自から知識を研くに若かず。知識を研き見聞を博くするには書を讀むを専一とす。書を讀むは横文字に若くものなし。」¹⁴⁾とも述べた。福沢は「人間とその社會におけるすべての善きものを智慧に基づけ、すべての悪しきものを無智に基づけた」¹⁵⁾つまりたとえ「愚民」であっても、知識を摂取することによって、新たな国民に転身する可能性が十分にあると福沢は信じ、しかもその暴民たちを変化させる力が、「横文字」で書かれた西洋学問にあると主張しているのである。福沢自身、『訓蒙窮理図解』の創作動機に言及した際、西洋の物理書の内容を一度でも理解したら、漢学など古い学問に復帰する人はいないと断言した。¹⁶⁾そして洋学者たちの目的については、下記のようにまとめている。

國中多數の人民を眞實の開國主義に引入れんとするの一事にして、恰も西洋文明の爲めに東道の主人と爲り、一面には漢學の固陋を排斥すると同時に、一面には洋學の實利益を明にせんことを謀り。¹⁷⁾

これらの事例により、福沢は西洋文明が必ず日本に真なる開化をもたらすと確信していたとわかる。その福沢が翻訳事業に積極的に参与したことは必然的であったといえるであろう。

12) 前掲、「福翁自伝」、162頁。

13) 前掲、「福澤全集緒言」、12-23頁。

14) 福沢諭吉、『福澤諭吉全集』（第十七巻）、93頁

15) 高坂正顕、『明治文化史 思想・言論編』（洋々社、1955年）、84頁。

16) 前掲、「福澤全集緒言」、34頁。

17) 同書、33頁。

2、文明への道程

攘夷と開国、二つの道で迷った日本は、明治政府のもとでようやく結束し、維新開国の道へと進んだ。しかし実践面においては、如何に西洋の文明教化を普及させるかという大きな問題を解決しなければならなかった。福沢は明治以来西洋文化を輸入する方法を批判し、「唯文明の外形のみを論じて、文明の精神をば捨て、問はざるもの、如し」¹⁸⁾、日本が欧米に敵わない要因はまさに文明の精神にあると断言した。福沢から見れば、日本政府のやり方は本末転倒であった。形だけでは決して日本を文明的な国にすることはできず、その古い中身を変えなければ、日本が変わることはない。そして、文明的の中身について、福沢は「人民の気風即是なり」と回答した。つまり、日本が西洋のような文明社会を作ろうとするなら、人民の気風を一新するのが第一歩である。¹⁹⁾そして日本文明の精神を発展させる方法について以下のように論じた。

唯其一法は人生の天然に従ひ、害を除き故障を去り、自から人民一般の智徳を発生せしめ、自から其意見を高尚の域に進ましむるに在るのみ。斯の如く天下の人心を一変するの端を開くときは、政令法律の改革も亦漸く行はれて妨碍なかる可し。人心既に面目を改め政法既に改まれば、文明の基、始めてこゝに立ち、かの衣食住有形の物の如きは自然の勢に従ひ、これを招かずして来り、これを求めずして得べし。故に云く、欧羅巴の文明を求るには難を先にして易を後にし、先づ人心を改革して次で政令に及ぼし、終に有形の物に至る可し。²⁰⁾

ここで福沢が示唆した国家、文明の発展構図においては、国民知徳の向上が原動力となっていることが伺える。国民の智徳を向上させることにより、政治や法律の改革も順調に進み、これら文明の土台を整えれば、衣食住など「形」の部分も自然に形成される。つまり、外見の形だけを真似するより、文化の中身から文明を求めたほうがよいと福沢は主張していたのである。

福沢が系統的に西洋文明を論述した名作、『文明論之概略』（1875）において、福沢は始終「人」の役割を強調し、国が文明の道をたどる要件の一つは国民の精神的発達だと主張した。書の冒頭に、文明論を「人の精神發達の議論なり」と定義している。さらに、「其趣意は一人の精神發達を論ずるに非ず、天下衆人の精神發達を一體に集めて、共一體の發達を論ずるものなり。故に文明論、或は之を衆心發達論と云ふも可なり。」²¹⁾とも指摘した。日本の文明化を実現するためには、国民全体の精神を発展させ、向上させるのが要務だと認識していたのである。この観点は著書翻訳の趣旨として、福沢自身によってしばしば語られている。例えば、『世界国盡』（1869）の序文において、福沢は天下の幸福も災害も下から起こり、その源は他になく、国民の智愚と関わっていると述べている。これによって、「今爰に世界國盡の著あるも、専ら兒童婦女子の輩をして世界の形勢を解せしめ、其知識の端緒を開き、以て天下幸福の基を立んとするの微意のみ」²²⁾と、『世界国盡』（1869）を著した目的を語っている。こうしたことから国民の啓蒙が天下禍福の根本であるとして重視し、日本国民の知識向上に努めていた福沢の姿勢が明ら

18) 福沢諭吉、「文明論之概略」『福澤諭吉全集』（第四巻）、20頁

19) 鹿野政直氏は福沢の啓蒙的言論の核心を「民心の改革」とまとめた。（『近代思想史案内』、50頁）

20) 前掲、「文明論之概略」、21-22頁

21) 同書、3頁

22) 福沢諭吉、「世界国盡」『福澤諭吉全集』（第二巻）、581頁

かである。

ただし、福沢にとって西洋知識の紹介は単なる西洋を見習うためのものではなかった。『学問のすゝめ』(1872)には「士農工商各其分を盡し銘々の家業を營み、身も獨立し家も獨立し天下國家も獨立すべきなり。」²³⁾とある。つまり貴賤を問わず、西洋知識を愛好する国民の育成によって、一身の獨立、最終的に一國の獨立を実現させようと望んでいたことがわかる。『福澤論吉緒言』において、内紛の時でも、米公使館の庇護を拒否した小幡仁三郎の行為を「悲壯痛快」と絶賛したのも道理である。小幡氏が云った「西洋文明の輸入は吾々の本願にして、彼を學び彼を慕ひ畢生他事なしと雖も、學問は學問なり、立國は立國なり、決して之を混淆すべからず」²⁴⁾という言葉は、まさに正真正銘の一身の獨立を宣言している。これこそ、福沢が西洋知識を翻訳し、日本国民に紹介する根本的な目的であったと考えられる。

三、翻訳と実学

当然のことながら、福沢より前の時代である15世紀半ばより既に日本には西洋から様々な書籍、知識が輸入されており、その歴史は決して短いとは言えない。しかし、蘭学時代の洋籍は幕府によって厳しく看視、統制されており、領域としても自然科学に限られていた。福沢は、これらの翻訳書は今後日本を文明国家として構築するためには不十分であると感じていた。

洋籍の我邦に舶来するや日既に久し。その翻訳を経るもの亦尠からず。然して窮理、地理、兵法、航海術等の諸学、日に闢け月に明にして、我文明の治を助け武備の闕を補うもの、その益豈亦大ならずや。²⁵⁾

ペリー来航後、「文明開化」の旗のもとで、留学生の渡航や、書籍の輸入の制限がかなり緩和され、知識人たちも西洋の政治や社会などに目を向けるようになった。しかしながら、明治初期においては、やはり漢学を尊び、学問というと漢学中心という認識が根強かった。だが、適塾で蘭学を学ぶうちに、福沢が儒学に最初の不信感を抱えてきた。²⁶⁾ それに、三回の欧米訪問によって、彼が「学問」に対する認識が徐々に明確となった。

福沢は、伝統的学問は「唯むづかしき字を知り、解し難き古文を読み、和歌を楽しみ、詩を作るなど、世上に實のなき文學を言うにあらず。」²⁷⁾と否定し、このような学問はごく一部の人が堪能するものに過ぎず、日用の間に合わないと批判した。福沢は東西教育観を比較することを通じて、西洋の教育内容と文明との関係について、次のように論述した。

ソコデ東洋の儒教主義と西洋の文明主義と比較して見るに、東洋になきものは、有形に於いて數理學と、無形において獨立心と、此二點である。彼の政治家が國事を料理するも、實業家が商賣工業

23) 福澤論吉, 「学問のすゝめ」『福澤論吉全集』(第三卷), 30頁

24) 前掲, 「福澤全集緒言」, 24頁

25) 前掲, 「西洋事情」, 285頁。

26) 伊原沢周, 「『学問のすゝめ』と『勸学篇』をめぐって」『日本と中國における西洋文化摂取論』(汲古書院, 1999年) 6-9頁

27) 前掲, 「学問のすゝめ」, 30頁。

を働くも、國民が報國の念に富み、家族が團欒の情に濃なるも、その大本を尋ねれば自から由来する所が分る。近く論ずれば今の所謂立國の有らん限り、遠く思えば人類のあらん限り、人間萬事、数理の外に逸することはかなわず、獨立の外に依る所なしと云ふ可き此大切な一義を、我日本國に於いては軽く視て居る。²⁸⁾

福沢が指摘した西洋文明の二本柱は数理学と獨立心、いずれも東洋においては欠如しているものである。西洋の数理学を日本に輸入する趣意もここから推測できるであろう。これにしたがひ、福沢は次のような「実学」をこれから日本國民が学ぶべきものとして提案した。

譬えば、いろは四十七文字を習ひ、手紙の文言、帳合の仕方、算盤の稽古、天秤の取扱い等を心得、尚又進んで学ぶべき箇条は甚多し。地理學とは日本國中は勿論世界萬國の風土道案内なり。究理學とは天地万物の性質を見てその働きを知る學問なり。歴史とは年代記のくわしきものにて萬國古今の有様を詮索する書物なり。經濟學とは一身一家の世帯より天下の世帯を説きたるものなり。修身學とは身の行を脩め人に交わりこの世を渡るべき天然の道理を述べたるものなり。²⁹⁾

上述の通り、福沢は実用ではない学問を次にし、日用に近い学問を重視すべきと提唱していた。具体的にいうと、地理と歴史を通じ、世界、特に欧米の情勢を把握すること。究理学により自然万物の動きを理解すること。経済学を活かして一身の獨立を求め、修身学を運用して人や国の交際の道理を見通すことなどが挙げられる。福沢の著書において、明確に翻訳と記されている本は、『雷銃操法』（1866）、『兵士懐中便覧』（1868）、『洋兵明鑑』（1869）、『英國議事院談』（1869）、『童蒙をしへ草』（1872）、『帳合之法』（1873）の六種類である。それ以外には、『西洋事情 外編』（1868）のように、著書の一部が訳文である場合もある³⁰⁾。これらの翻訳や著書の具体的な内容を見ると、前述の「実学」重視の理念を反映していることが明白である。

福沢は「およそ物の有害無害を知らんとするには先づ其性質を知ること緊要なり、其性質を知らんとするには先づ其物をみつことと緊要なり」³¹⁾として、物事の性質や原理を知る学問、すなわち、物理学の重要性を強調した。物理学の輸入に関して、「少年子弟又は老成の輩にても、一度び物理書を讀み或は其説を聴聞して心の底より之を信ずるときは、全然西洋流の人と為りて漢学の舊に復歸したるの事例殆ど絶無なるが如し」³²⁾と、自信満々にその魅力を語っている。これによって、國民の物理入門書として『訓蒙窮理圖解』（1868）を綴った。物理学のみならず、國民が西洋ないし世界の情勢をより一層理解できるように、アメリカとヨーロッパに訪問した際収集した本から、西洋などに関する情報を抄訳し、色々な本を著した。例えば、大変な売れ行きを示した『西洋事情 初編』（1866）は、福沢が収集した歴史地理などの本から、西洋列國の条を抄訳し、重要なものを抽出して史記・政治・海陸軍・錢貨出納四つの項

28) 前掲、「福翁自伝」、168頁。

29) 前掲、「学問のすゝめ」、30頁。

30) 『西洋事情 外編』はチェンバーズ社出版の『經濟讀本』の前半部「ソーシャル・エコノミー」を訳出し、いくつかの箇所ではウェーランドの『經濟学要綱』や「ブランド氏學術韻府」の抄訳も付け加えた。（高橋弘通、「福沢思想の源泉としての『西洋事情』」より、『東九州短期大学研究紀要』8号、1999年、89頁）

31) 福沢諭吉、「經世の學亦講究す可し」『福沢諭吉全集』（第八卷）、53頁。

32) 前掲、「福澤全集緒言」、34頁。

目に分けたものであるという。史記によって時勢の沿革を顕し、政治によって国体の得失を明らかにし、海陸軍によって武備の強弱を知り、錢貨出納によって政府の貧富を示す。根本な目的は「この四者既に世人の眼目に触れば、これに由て略々外国の形勢情実を了解し、果して彼の敵視すべきものかその友視すべきものを弁別し、友は則ち之に交わるに文明を以てし、敵は則ち之に接するに武経を以てし、文武の両用その所を錯ることなきに庶幾らんか。」³³⁾ ということである。同書は1866年に初編三冊を刊行してから、1868年にさらに外編三冊、1870年には二編四冊を刊行した。その内容は政治、議会や学校、新聞、病院、ガス燈などに及び、アメリカやイギリス、フランス等の国の歴史や特徴も説明している。西洋文明が科学技術や兵学に限られるという認識を正し、西洋の実態をより一層全面的に日本国民に紹介した。それ以外には、『西洋衣食住』(1867)、『世界国盡』(1869)、『掌中萬國一覽』(1869)、『英國議事院談』(1869)など、西洋や世界についての情報を紹介する本も出版された。特に、『世界国盡』(1869)という本は、五字七字の口調で書き綴じられており、福沢は覚えやすい江戸方角、都路の手本を何度も熟読し、その口調に従って書き上げた。児童や婦女でも容易に暗誦できるように、非常に苦心を費やしたと言えよう。一方、一身の独立に欠けない経済の独立を実現するための経済学についても、福沢は西洋から様々な情報を取り入れた。『帳合之法』(1873)は日本における西洋簿記学の最初の文献だと言われている。この本はアメリカで連作組織の商業学校六十校ほどを運営していたブライヤントおよびストラットン共著の学校用簿記教科書(Bryant and Stratton Common School Book-keeping)を翻訳したものである。³⁴⁾ また、『民間経済論』(1877)のような日本経済の実状に即した初心者のための経済原論書もある。福澤の翻訳著書は啓蒙を出発点として、平易で分かりやすく書きあげたものが多く、学校でよく用いられていた。

前述のとおり、西洋文明に対する理解に基づき、福沢は数理や経済のような実用的学問を選択し翻訳した。このような学問を通俗に翻訳し、国民に紹介することを通じて、国民の独立を求めた。これに関して、丸山真男は「福沢の実学に於ける真の革命的転回は、実は、学問とは生活との結合、学問の実用性の主張自体にあるのではなく、むしろ学問と生活とがいかなる仕方で結びつけられるかという点に問題の核心が存する。(中略)つまり彼は東洋社会の停滞性の秘密を数理的認識と独立精神の二者の缺如のうちに探り当てたのである。」³⁵⁾と述べた。言い換えれば、福沢は伝統的学問から切り離し、西洋文明を模範とし、国民の素養を中心として、新たな日本文明を作ろうと努めていたとも言えるであろう。

四、新文体と啓蒙の志

1、漢文訳への批判

江戸時代から明治期にかけて、漢学出身の洋学者は少なくなかった。漢文の読み下しに慣れた知識人たちは漢文体で西洋書籍を翻訳するのが常であった。それも平安朝時代の仏典翻訳からきた翻訳法であ

33) 前掲、「西洋事情」、285頁。

34) デジタルで読む福澤諭吉、慶應義塾図書館。http://project.lib.keio.ac.jp/dg_kul/fukuzawa_title.php?id=68

35) 丸山真男、「福沢における「実学」の転向」(『東洋文化研究』第三号、1947年)、6-7頁

る。しかし福沢はこのような漢文に拘った翻訳法を厳しく批判した。

西洋の原書を翻譯するに四角張った文字ばかり用ふるは何の爲めなるや、詰る所は漢學流の機嫌を取る積りならんなれども、今の文明世界に漢字を詮索するが如き閑日月はある可らず、御同前に眼中漢學者なしと度胸を定めて、唯新知識の傳播を勉むべきのみ。³⁶⁾

しかしながら、英語であれ、フランス語であれ、西洋の文字は漢語と大きく違い、古くから用いられていた漢文の読み下しのような翻訳法は洋書翻訳に向いていない。適切な訳語を探すことも、漢文体で流暢に訳文を綴ることも容易ではなかった。これについて、福沢は漢文体の限界を鋭く見抜いていた。

同時に江戸の洋学社会を見るに、著訳の書固より多くして何れも仮名交りの文體なれども、動もすれば漢語を用ひて行文の正雅なるを貴び、之が為めに著訳者は原書の文法を讀碎きて文意を解するは容易なれども穩当の訳字を得ること難くして、學者の苦しみは専ら此邊に在るのみ。蓋し百年來の翻譯法なれども、斯くては逆も今日の用を弁ずるに足らざるを信じ、依て竊に工風したる次第は、漢文の漢字の間に仮名を挿み俗文中の候の字を取除くも共に著訳の文章を成す可しと雖も、漢文を臺にして生じたる文章は仮名こそ交りたれ矢張り漢文にして文意を解するに難し。³⁷⁾

こうした問題について、福沢は次のような翻訳方法を提唱していた。

俗文俗語の中に候の文字なければとて其根本俗なるが故に俗間に通用す可し。但し俗文に足らざる所を補ふに漢文字を用ふるは非常の便利にして、決して棄つ可きに非ず。行文の都合次第に任せて遠慮なく漢語を利用し、俗文中に文法を紊亂し、唯早分り易き文章を利用して通俗一般に廣く文明の新思想を得せしめん。³⁸⁾

このような方法で翻訳した文章は「教育なき百姓町人輩に分るのみならず、山出の下女をして障子越にきかしむるも其何の書たるを知る」³⁹⁾という程であった。こうしたことも福沢の著書が非常に人気があった理由の一つであろう。しかしながら、通俗的な訳文を作るのは漢文より一層難しいことであったと考えられる。福沢も「少年の時より漢文に慣れたる自身の習慣を改めて俗に従はんとするは随分骨の折れたることなり」⁴⁰⁾と感嘆している。そこには彼が師事した緒方洪庵の影響があった。

2、緒方洪庵の影響

「緒言」において、福沢は旧物が廃棄され、新物が大量に輸入された明治維新後の四十年感を振り返り、日本文明開化の実績を感嘆すると同時に、自分の訳書もその実績の一部を占めたと自負している。⁴¹⁾確かに彼の文章は多くの人に読まれ、多大な影響力を発揮した。その原因は、おそらく福沢の「平易さ」を重視する翻訳スタイルに負うところが大きいと思われる。世間が福沢の文章は平易で読みやすいと評

36) 前掲、「福澤全集緒言」, 9頁。

37) 同書, 4頁。

38) 同書, 6頁。

39) 同書, 6頁

40) 同書, 6頁

41) 同書, 3頁

働したことに對して、福沢自身もそう認めていた。⁴²⁾ 福沢の翻訳は近代に日本語文体の平易化に大きな役割を果たした。⁴³⁾ 山本正秀氏は福沢の文体を「通俗平易な新文体の創造」⁴⁴⁾ という評価を付け、林巨樹氏はその文体を「極端な漢文訓読み体でも、極端雅文体というでもなく、一種の新しい文体」⁴⁵⁾ と言った。

実は、福沢の訳文は師の緒方洪庵に大いに影響されている。緒方洪庵の翻訳理念について、『緒言』には次のように語られている。

抑も翻訳は原書を読み得ぬ人の為めにする業なり、然るに訳書中無用の難文字を臚列して、一読再読尚ほ意味を解するに難きものあり、畢竟原書に拘泥して無理に漢文字を用ひんとするの罪にして、其極、訳書と原書を対照せざれば解す可らざるに至る、笑ふ可きの甚だしきものなり云々。⁴⁶⁾

ここから、緒方洪庵は翻訳とは外国語の読めない人のための営為と強調し、漢文にこだわって結局読者がよめない訳文ができたのでは無意味であると主張していることが見て取れる。また、他人の訳文を添削する際、原書を見ずに直接に筆を下すのは師の緒方洪庵一人しかいないと福沢は述べている。そして築城書を翻訳する際、緒方洪庵は福沢に難しい訳語を使わないように注意した。築城書は武家のために訳すものであり、読者の教養を考えず、難解な訳語を使ってしまい、結局読者が読めなければ無駄になるからである。その懇到な一言は福沢の心に響き、翻訳生涯において、「著訳を試るに至りても、力て難解の文字を避て平易を主とするの一事は曾て念頭を去らず」⁴⁷⁾、できるかぎり平易な訳文を用い、より多くの原本が読めない人のためにと、翻訳著書に努めることになったのである。

上述したように、読者を想定し、彼らの理解を最優先にするという理念は福沢の翻訳観を構成する非常に大切な部分だと思われる。福沢の訳文の基調がこれで決められたと言っても過言ではなかろう。前述で何度も言及したように、福沢の翻訳著書の主な目的は国民を啓蒙し、文明に導こうとすることである。しかも、従来のエリート層より、むしろ従来重視されていなかった子供や婦人などの啓蒙により一層念を入れたと言ってもよかろう。できるだけ俗語を使う福沢の主張はやがてひとつの時代、文化史上の啓蒙時代を開いた、と柳父章がそう評価した。⁴⁸⁾ その理念を活かしたお陰で、「教育なき百姓町人輩に分るのみならず、山出の下女をして障子越にきかしむるも其何の書たるを知る」というほど人気のある文章が生み出したのであろう。物理学の入門書『訓蒙窮理圖解』（1868）を著す趣旨についても、平易な訳文を通じ、学者のみならず、一般国民にも物理学を紹介しようとする心境が伺える。

然るに開國以前既に翻譯版行の物理書なきに非ざれども、多くは上流學者社會の需に應ずるものにして、其文章の正雅高尚なると共に難字も亦少なからず、且つ翻譯の體裁専ら原書の原字を誤るなからんことに注意したるが為めに、我國俗間の耳目に解し難きものあり。⁴⁹⁾

42) 同書、4頁

43) 吉武好孝、『明治・大正の翻訳史』（研究社、1959年）、25頁

44) 山本正秀、『言文一致の歴史論考』（桜楓社、1971年）、26頁。

45) 林巨樹、「現代の文体」『講座国語史6 文体史・言語生活史』（大修館書店、1972年）、179頁。

46) 前掲、「福澤全集緒言」、4頁

47) 同書、6頁

48) 前掲、『翻訳語の論理——言語にみる日本文化の構造』、54頁

49) 前掲、「福澤全集緒言」、34頁。

漢文体ではなく、日常の日本語に近い文体で翻訳するのは当時においては稀というより、むしろ怪異と考えた。福沢は『緒言』において、高名な漢学者高谷龍洲に、自分の文章が評価された一方、漢文が出来ないと誤解されたという残念な思いを語っている。高谷氏は勉学すれば半年で日本一の文章家になると福沢に漢文の勉強を勧めた。この「励まし」に対し、福沢は真宗の開祖親鸞上人が自ら肉を食べ、肉食の男女を教化した例を挙げ、自分も、俗で平易な文章を書くことを通じ、世俗の人々とともに文明の道を辿ろうという心境を述懐した。文体より論理、爽快さより平易さを重要視し、新文明を日本に輸入、伝播し、国民を文明に導くという明確な目標を持ったことが、漢文重視の世論を無視し、自分の俗文主義を貫いた福沢の精神力の由来と言えよう。

五、おわりに

本文では、福沢の翻訳の成立過程、内容及び思想などについて論じてきた。翻訳者の翻訳は唯の文字変換ではなく、外来文化に対する受容態度も反映されている。漢文訳、俗文訳の論争は、表面的には文字を翻訳する「技術」が取り上げられているように見えるが、実は他文化に対する理解と自文化に対する期待が同時に含まれている。福沢の翻訳はただその時代の一角でしかないが、それをめぐる諸問題から近代化に対する日本の学者の姿勢や葛藤が伺える。柳父章氏は福沢の思考方法に関して以下のように論述している。

このような態度から、日常語を使ってものを考える、という福沢の思考方法は、自ずと導かれていた。日常語は、福沢にとって、啓蒙の方便であるばかりでなく、遂に思考のための基本的な素材ともなっていた。それは、必ずしも一貫して意識された方法となっていた、とは言えないかも知れない。それは、彼が自ずと到達していた方法であった、と言うべきであろう。が、時には鋭く反省もされ、意識されていたのであった。⁵⁰⁾

一方、平易な訳文を優先することは原語の一部を省略しなければならない場合があることを意味する。逆に日常語によって異質文化を語ろうとする方法はより一層困難である。⁵¹⁾ 岩谷十郎は福沢が平易な訳語を求め、一般国民の理解しやすい文章を追求しようとするために、訳語と原語との乖離を導いてしまったと指摘している。⁵²⁾

しかしながら、国民を啓蒙し近代日本を構築することに努めたという側面から考えると、如何に効率的に日本社会に文明開化を浸透させるかという大問題を解決するには、それなりの妥協が必要になるだろう。啓蒙という明確な目的性を持つ福沢の翻訳において、言葉の隔たりをできるだけ軽減し、実学を優先するという方針は、まさに「実用的」である。この理念は、福沢の翻訳の形式と内容、両方に反映されている。福沢の翻訳思想に含まれている目的や意識は、彼の西洋文化に対する受容姿勢の投影であり、そこには彼の「受容」という行為への思考と反省が見えてくる。実学思想であれ、俗文主義であれ、

50) 前掲、『翻訳語の論理——言語にみる日本文化の構造』、57頁。

51) 柳父章、『翻訳語成立事情』（岩波書店、2003年）、36頁。

52) 岩谷十郎、『法文化の翻訳者——ことばと法と福澤諭吉』（『福澤諭吉年鑑』第30号、2003年）、99-111頁。

決してただの翻訳観ではなく、彼の西洋文化、知識への捉え方とも繋がっている。翻訳と啓蒙の相互作用が奏でたのは、福沢が描いた、近代日本に対する予想図であったとも言える。

〔附記〕本稿は厦門大学基本科研業務費の助成を受けたものである。